

すごい努力したのに、その努力が全く報われなかった時、みんなはどうする？ぼくは今、**完全に心が折れている**。今回の話は、いきもの記始まって以来初めての、ターゲットのいきものがどうしても**“見つからない”**エピソードだ。

この発端は去年の文化祭に遡る。有志企画の「蟲部屋」でカエルの写真の展示をした時（Vol.159）、その展示を見た2人の中学生が話しかけてくれた。「カエルと同じ両生類つながりで…」と2人は、以前東京の山でサンショウウオを見つけたことを教えてくれて、確かに写真には美しい**ヒガシヒダサンショウウオ**が写っていた。彼らは見つけた場所をピンポイントでぼくに教えてくれた（本当は希少生物の発見場所は安易には他人に教えるべきではない。乱獲される危険があるからだ）。当時、ぼくはサンショウウオに詳しくなくて、「気が向いたら行ってみるか」ぐらいにしか考えていなかったのだが、後になって、小型サンショウウオは**プロでも探すのが難しい**ことを知った。それでも、ぼくには**ポイントの情報**がある。適切な時期に行きさえすれば見れるものだと思っていた。甘かった。甘すぎた…。**地獄の始まりである**。

繁殖期である冬になり、教えてもらったポイントに行ってみて呆然とした。まずポイントまで辿り着けないのだ。そこは木々をかき分けながらじゃないと進めない道無き道。「あの中学生たち、何者…?!」嫌な予感がし始める。結局、そんな茨の道を突き進んでもサンショウウオなんて全く見れず。これはもしや、超難易度が高い案件に首を突っ込んでしまったのでは…。でも、一度探し始めてしまうと、**見たい気持ちがかんたん強くなる**。それ以来、寝ても覚めてもヒガシヒダのことが頭から離れない。沼にハマった。そこからは文献を調べて生息地を絞り、暇を見つけては東京西部の色々な山に通って、登山道から外れて人っこ1人いない**沢という沢を登り続けた**。正直言って、こんなにやって見つからないのが信じられない。ヘビなどのように神出鬼没タイプの生物は探すのがとても難しいが、サンショウウオは繁殖のために絶対に特定の川に来る。しかも、いくつかの沢で**幼生は見つかった**。つまり、幼生が見つかった沢に繁殖期に来れば**成体が絶対にいるはず**なのだ。日中は大きめの岩の下にいるので、沢に行っては両手で抱えるほどの岩をひっくり返してひっくり返してひっくり返して…昨年末から累計、誇張抜きで**数百個の岩をひっくり返しまくってきた**（想像してほしい。山でおっさんが一人でうりゃ！おりゃ！とか言いながら岩を転がしている姿を。熊も逃げそうだ。）それでも見つからず、山中で何度発狂しそうになったことか。そしてついに、今年の繁殖期が終わってしまった。ほかあ、さすがに心が折れたよ…。ここまで本気で生物を探したのは初めてだ。

ああ、あの中学生たちにもっと詳細を聞いておくべきだった…。学校名と名前を聞いておくべきだった…。と言うか、今思えば、**どうも話が上手くできすぎてはいないか？**なんで見ず知らずの男にポイントまで教えてくれたのだ？**本当にあの2人は存在したのか？**狐に化かされたんじゃないか？！

さて、4月のこのタイミングでこのいきもの記を書いた意味、分かった？一縷の望みを託して……**おーい、この中学生2人組！今年うちに入学してないですか？！頼む、これを見たらすぐ名乗り出てくれー！！**（必死）

※4月13日追記：見つかりましたー！（2人のうち1人は今年入学していました！狐じゃなかった！1学年担任の皆様ご協力ありがとうございました。）



**搜索環境** 東京都西部の山の奥地 3月  
沢を見つけたらとにかく沢沿いに登り続け、水がちょろちょろとしか出ていないような源流部まで行くと、岩の下にヒガシヒダサンショウウオがいる（らしい）。場所と時期を変えて何度も探したが全く見つからなかった。冬なのに大汗をかいて、腕と足がパンパンになった。



**ヒガシヒダサンショウウオの幼生**

サンショウウオと言えば、日本人の多くは井伏鱒二の小説『山椒魚』に登場するオオサンショウウオを連想してしまつたため、巨大な生き物だとイメージする人も多いと思う。だがじつは日本には小型サンショウウオと呼ばれる、せいぜい15cmほどの可愛いサンショウウオがたくさんいて、サンショウウオ大国とも呼ばれている。ただ見つけにくい種類が多く、知名度は低い。平地に住むトウキョウサンショウウオはやや有名か。とくにヒガシヒダサンショウウオは溪流の源流部のみに生息するため、相当なマニアしか野外で見たことがある人はいない。海外の種類だがペットではウーパールーパー（メキシコサンショウウオ）がサンショウウオの中で最も有名だろう。



**凍った沢** 2月

一番寒い時期は沢の水が凍り付いていてとても美しかった。水しぶきが跳ねて、それがすぐ凍って、不思議な造形を成していた。冬なのでほぼ生物もおらず、ターゲットも見つからない過酷な状況の中で、つかの間の癒しの光景だった。